

＜不二の山＞秋の深まりとともに空気が澄んできてこれから3月ごろまで富士山の見られる日が多くなります。富士山は二つとない霊峰という意味で“不二の山”であり、また眺めているその時々にも二つとない姿を見せます。山の周りには雲がすぐに湧き出しそれが刻一刻と姿を変えていくためでしょう。もう一月ほどすると雪を頂いた姿になりますが、積雪、日の光、そして雲の変化がその時の山の姿を演出します。そして近景となっている木々の紅葉、落葉と芽吹きがビオトープの季節の移り変わりを教えてくれます。次の春の訪れまで同じ場所から眺めた富士山を折々に紹介しましょう。



＜原風景＞子供の頃、初夏から秋にかけて学校の行き帰りの道端に生えているエノコログサを抜いて遊んだ記憶はありませんか。あまりにもありきたりの雑草なので“人権”を得ていないがごとき扱いをしてきましたが、ふと目にとまったエノコログサの穂は朝露に濡れて何とも可愛らしく見えました。猫の目の前で穂を振るとじゃれつくことから



＜エノコログサ＞

“ネコジャラシ”と言いますね。でも穂が子犬の尻尾に似ていることから元は“犬ッコロ草”、それが変じてエノコログサになったようです。ところでエノコログサの種はアワのように食べられます。



＜タラノキの花＞

＜花より団子＞春の花見の頃にこそふさわしいと思えますが、タラノキの花を見てこの言葉が幾分の反省の気持ちとともに浮かびました。春先に新芽が出ると「天ぷらにしたら旨そうだな、どれ位摘み取っても大丈夫かな」なんてことをまず思います。その季節が終わるとこの木のことなど気にも留めなくなります。花の後には小さな黒紫色の実がいっぱい付くのですが葉の落ちる頃にはこれも忘れてしまいます。

＜造化の妙＞春先からいろんな花を見てきましたが、秋の花の方に“造化の妙”とも言える豪華、複雑なものがあるようです。その一つがホトトギスで、ここでは珍しいシロ（バナ）ホトトギスを紹介します。よくあるうす紫の花



＜シロバナホトトギス＞



＜ヤマツツジの狂い咲き＞

のものより一足先に咲き出しました。

＜狂い咲き＞今年は夏のあまりの暑さで多くの植物が葉を痛めてしまったようです。そのせいか秋口に幾つかの春の花が狂い咲いています。ビオトープではヤマツツジが沢山の花を付けています。「この季節に」とも思うのですが春と秋の二度咲きするツツジもあるようです。 (文と写真：松本正勝)